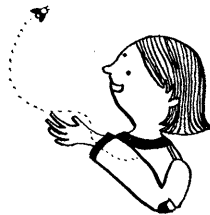


虫は子どもの友達

— 虫と遊ぶその奥で何に気づくのか —

津吹 卓



虫と遊ぼう

子どもはみんな、もともと虫が好きです。子どもを見ていると、僕にはそう思えてなりません。なぜでしょうか。それはきつと、動くものへの興味なのではないでしょうか。だから虫を見ると、追いかけて捕まえるのではないのでしょうか。そして虫採りの

遊びの中で、自然に虫と友達になり、夢中になって追いかけて、捕まえるのです。たとえばダンゴムシ。

子どもは捕まえ始めると、たくさん欲しくなりまします。すると、どこに行けばたくさんいるのか、どうしたらたくさん採れるのかを考え、いろいろ工夫します。自然の中で、無意識のうちに頭を使い、体を使い、満たされる喜びを体験するのです。

子どもたちは、虫採りから多くのことに気づき、ごく自然に学んでいるのです。うまく採れない子どもがいた場合、大人が採り方を教えて、うまく採れたら褒めればいいのです。すると子どもは自分で採ることができ、褒められて、もつとうれしくなります。そして、虫採りがさらに好きになります。友達から学ぶこともあるでしょう。一番大事なことは、自分で捕まえる体験であり、そのために自然から学ぶことなのです。しかし現在、このような体験のない中高生がいかに多いことでしょうか。

虫とのつき合いを深めよう

虫とのつき合いをもつと楽しくするには、どうしたらよいでしょうか。それは、五感を使って「虫の生き方」を感じとることです。「視覚」は当たり前ですが、子どもは自分が気になったところを勝手に見えていますね。だからお母さんや先生とは違うことに

気づくことも多いのではないのでしょうか。見方はそれぞれでよく、何が正しいというわけではありません。だから何に気づいたのかを子どもに聞いて説明してもらい、意外性に驚き、共感すればよいのです。

虫には「におい」もあります。種類によりますが、たとえばちよつとした丘に普通にいる白いチョウ、スジグロシロチョウの雄をかぐと、レモンのようなにおいがします。これは交尾のために雄が雌に近づいたとき、雌をなだめるにおいです。

ミカンの木などにいるアゲハチョウ類の幼虫を突つくと角を出し、そこから敵を撃退するための強いミカンのようなにおいが漂います。僕はこのにおいが好きです。バッタなど草食昆虫のふんを手でもんでみると、草のにおいがします。すると、このふんはそんなに汚いとは思えなくなります。クヌギ林を歩くと、カブトムシのにおいがすることがあります。きつと夜には飛んできていますのでしょ。カ

メムシの仲間には、驚くと異臭を放ちます。敵を撃退するためです。

「手触り」も、虫を手で捕まえてみて初めてわかります。六月中旬に羽化したばかりのアカトンボは、赤ちゃんのほおのように柔らかかみみずしく、強く持つとつぶれそうです。でも時間がたつと硬くなり、十月下旬の老年のトンボの肌は、人間と同じと言ったら怒られてしまいますが、カサカサです。羽化後にだんだん硬くなるのは、どの虫にも共通です。手に持ったセミが鳴くと、手に震動が伝わりまゝ。虫を手で持つていかまれることもあります。偶然ですが大切な体験です。虫も嫌なときはかむのです。虫は生き物であり、おもちゃではないのです。痛いから、子どもはかまれない持ち方を工夫します。僕が今までかまれたのは、トンボ・カミキリムシ・クワガタムシ・カマキリなどでしょうか。手に止まらせたテントウムシが指の上に登ってい

き、いきなり羽を広げて飛ぶ、これは、子どもには大きな驚きです。

日常でよく耳にする「虫の声」は、セミやコオロギなどでしょうか。しかし目をつぶってみると、意外な「虫の出す音」に気づいたりします。虫が歩くときやアオムシが餌をかじるとき音、カヤハチ、カブトムシの飛ぶ「羽音」など。またカミキリムシは、首でこすってキイキイと鳴きます。

「虫の気持ち」を考えよう

虫ともっと親しくするには、虫の動きを見て「虫の気持ち」を考えるとよいでしょう。では、どんな虫の何を見ればよいのでしょうか。

虫は普段よく見る虫で充分です。なぜなら、いつでも何度でも見ることができからです（でも時には一期一会のこともあります）。そして、どんな動きを体のどこでするかを見ることです。虫も生きて

いるので、自分のために、食べて・出して（排泄）・歩いて、跳んで、飛んで・体を掃除して・体温を調節して（変温動物なので寒いと日光浴をし、暑いと日陰へ逃げる）、アオムシなどは脱皮したり、羽化して親になる（たとえばセミ・チョウ・トンボ）などが挙げられます。また、雄は鳴いて同じ種類の雌を呼んで（セミ・コオロギなど）交尾をするし、他の虫との関係では、相手を食べたり（トンボ）、敵から逃げたりと必死です。動きにはこんなシナリオが考えられます。

では、虫のいる現場ではどうするのか。たくさん捕まえることに満足した子どもは、次に虫をよく見ようとしています。そのときに動きを見て、「この虫は何をしたいのだろうね」などと、一緒に考えていたのだと思います。正解は不要です。虫の「気持ち」になって「謎解き」をしてください。理屈で言うと同じ虫をいろいろな場面で何度も見て、虫の動き

やしぐさの共通点や相違点を考えながら真実に近づく」ということです。大事なことは、正解や知識ではなく考える過程であり、謎解きを楽しむことです。

虫を飼うといろいろなしぐさが観察できて、もっとよくわかると思います。一匹の虫でも「虫の体調」によって動きも違うし、日によっては同じことをしないことに気づくかもしれません。また、同じ種類でも、虫一匹一匹で行動が異なることもよくあります。体の大きさが違ったり、個性や生きてきた中の「学習の違い」もあるかもしれません。虫は同じ機械ではなく、一匹一匹がそれぞれに生きているのです。そして、時には「死ぬ」ということも起こります。寿命で、また子どもが一所懸命に飼っても、いい加減に、あるいは間違った飼育方法で、または病気でと、死ぬ原因はさまざまです。そのとき、なぜ死んだのかは考えてほしいと思います。最も大事なことは、生きているものは必ず死ぬという体験で

す。時には、子どもが虫をいじめて殺すこともあるでしょう。でも、子どももともと残酷な面ももっていると思います。現在子どもにとって、家庭における「死」の体験は激減しています。死ぬということを、たとえ虫であつても体感させてほしいと思います。

なお、凶鑑の使い方ですが、無理に読ませる必要はありません。生きている本物から学べばよいのですから。ただ、凶鑑を見たがる子どもには、見せればよいと思います。その場合、実物を見ることで知識が確認され、真実を理解する上で役に立つでしょう。単なる凶鑑の知識だけあつても、あまり意味はないと思っています。

次に「虫の名前」の扱いです。正しい名前がわかればそれに越したことはありません。子どもは理屈抜きにすぐに名前を覚えてしまいますから。でもわからなければ、よい名前を付けければいいのです。子

ども同士、あるいは大人と、どの虫の話かわかればまずはよいのです。子どもたちがよく言う「バナナムシ」は、ツマグロオオヨコバイの幼虫です。でも、黄色くて三日月形だからバナナムシなんて、ピッタリのネーミングではありませんか。

「虫の生き方」から

「ヒトの生き方」の感覚を学ぶ

これまでも触れましたが、虫は生きています。それを見ることで「生き物の感覚」や「生きるって何だろう」ということを、子どもは体感を通して無意識のうちに気づくのだと思います。前述のように、虫は同種でも個体間で違い、さらに同じ個体であっても時と場合により動きは異なります。これはヒトと同じですね。そして、虫は勝手に虫のペースで生きています。決して子どもの思いどおりにはなりません。餌をやらないと死に、一所懸命にかわいがつ

ていても死ぬのです。電池で動くおもちゃとは基本的に違うのです。たとえば、働きアリも調べてみると結構サボって(?)いるのです。でも、敵から襲われて逃げたりする大事な場面では、決して手を抜きません(もし手を抜くと死につながります)。虫は「すべてを完璧に」を目指してはいないのです。虫はよい意味でいい加減な生き方で、うまく生きているのです。

では、ヒトはどうでしょうか。虫もヒトも「生き物」です。しかし、最近の生徒や保護者は「完璧を要求」し過ぎる傾向があり、その結果 *All or nothing* となってしまうのが非常に気になります。これは全国的な傾向です。

私たちは人である前に、動物としてのヒトなのです。しかし、それをわからずに「完璧なよい子」を要求する保護者がいて、それに応えようと完璧を目指し燃え尽きる生徒がいるのです。保護者も生徒

も、生徒の心や体の悲鳴に気づかないのです。ストレスを内側にため込むと不登校につながり、外へ強く発散すれば事件を起こしてしまうのです。

勉強でも、本来ごく自然な「なぜだろう」とか「不思議だなあ」とか「わかった、そうなんだ」という素直な気持ちがなく、テストの得点だけを意識して理解抜ききの暗記に終始する生徒が多いのです。もっている知識を基にして調べ考え、自分なりの考えを組み立ててつくり出していく喜びを知らないのです。生活や自然の中の体験が極めて乏しく、素直に学ぶ体験もせずに育ってきているのです。多くの高校や大学の先生方からも、同様の話をよく聞きます。

将来、*本来の人*らしく生きていくためにも、虫を含めた自然体験は極めて重要です。生き物の発想から、人の生き方を考えられればと思います。

(十文字中学・高等学校〈理科/生物〉 教諭
十文字学園女子大学 児童幼児教育学科 非常勤講師)